

# 日本の大学における留学生教育の課題：授業や研究指導に関して

著者	管 斌
引用	人文学論集. 2011, 29, p.173-178
URL	<a href="http://doi.org/10.24729/00004417">http://doi.org/10.24729/00004417</a>

# 日本の大学における留学生教育の課題

## 授業や研究指導に関して

上海財経大学国際文化交流学院講師  
管 斌

2008年2月日本政府はそれまで「留学生受け入れ10万人計画」が2003年に達成されたのを受けて「留学生30万人計画」を打ち出した。優秀な留学生を獲得するには何よりも魅力ある大学がなくてはならない。その中で、留学生向けの教育プログラムの構築、教員の授業や研究指導が最も重要である。

留学生として私は2004年日本の大学の修士課程を卒業した。卒業後直ちに帰国し、上海の大学で留学生教育に携わるようになった。小論は、日本での留学経験と現在の留学生教育に携わる教員としての、二つの視点から日本の大学における留学生教育の課題について検討したい。

### 一、学部留学生と修士課程留学生の日本語教育について

日本の大学で学ぶ学部留学生や修士課程の留学生の大部分は日本語能力検定の一級に合格した学生である。だから日常生活における言葉で不便することはあまりないが、しかし、日本語能力検定1級レベルの語学力だと、大学あるいは大学院で専門知識を勉強するには未だ足りないと思う。[話す]あるいは[表現力]までにはほど遠い。レジュメの作成やレポートの作成、ゼミでの発表において自分の考えを上手く表現することができないことがしばしばある。

こうした問題を避けるためには、大学や大学院に入学した後も続けて日本語の勉強に時間を割く必要があると思う。

私のわずかな経験からではあるが、日本の大学における日本語教育に対する率直な意見を言わせていただきたい。

### 1. 個別指導の強化

私が大学院に入る前に、ある大学の留学生別科で日本語を勉強していた。その時、10人程度の少人数で日本語を集中して学ぶクラスであったので、留学生と先生との会話の機会も多く、私自身も自分の日本語が日々伸びていくことを感じていた。一方、大学院

に入ると、大学留学生センターの日本語教師の数が少なく、一クラス 50、60 人で、教師から個別に指導を受ける機会もほとんどなかった。その上、留学生同士の日本語能力の差も大きく、すべての学生が満足できるような授業を行うことはできなかった。

現在日本の大学で学ぶ留学生の数は年々増加しているが、日本語教師の人数には限りがあるので、非常勤講師や日本人学生のボランティアを増やしていくことによって留学生により多くの個別学習の機会を提供することができるのではないかと思う。

## 2 . 日本語教育内容の改善

現在でも、日本の多くの大学の留学生センターは、主に中上級の日本語、日本文化を中心とした授業を行っている。しかし、こうした教科書主体の授業を受けるだけでは留学生が学術的な議論に積極的に参加することは難しい現状にあると思う。そのため、現在の上級の日本語、日本文化の教育に加えて、学術的(アカデミック)な研究や議論を行うための実践的な訓練を行うことを提案したい。とりわけ文系の大学院生について言うと、ディスカッションの準備段階で必要なレジュメの作成などのライティングスキル、またオーラルコミュニケーションスキルなど、研究に役立つリテラシースキルが学べる環境を整備することが必要だと思う。留学生に対してこうした実践的なトレーニングの場を多く設けることは、必ず専門分野の研究向上にも役立つと思う。

## 3 . 専門分野に対応できる日本語教育について

大学院時代、私の大学は教育分野の専門大学ではあるが、留学生担当の先生たちが開設していた日本語クラスの学習内容は中上級の日本語や日本文化に関するものだけで、残念ながら教育の専門とは無関係なものばかりであった。

しかし実際、留学生が専門の講義を受ける際に、問題が発生する重要な原因は専門用語や専門的な記述表現が分からないからということが多いのである。

どうしたら留学生が早く専門分野の学習に慣れることができるだろうか。ここでひとつ私が今所属している上海財経大学の事例を紹介したい。

中国の外国人留学生は、基本的に大学で中国語教育を受ける。(中国には中国語学校は少ない。)上海財経大学の大半の留学生は、まず本大学の国際文化交流学院で中国語を学習して、中国語検定 6 級に合格した後、金融学部や商学部などそれぞれの専門学部に進む。しかし、留学生からよく専門科目、専門用語が難しくて分からないという声が寄せられる。

そのため、上海財経大学は 2006 年頃留学生のための特別な振り替え科目を新設し、

様々な改善をしてきた。

本大学は経済管理分野の専門大学で、大半の留学生は国際貿易や国際金融などを専攻するため、国際文化交流学院と専門学部が共同で商業や貿易、マネジメント学などで用いる中国語の教材を編集した。大学1年の留学生に対して、経済・マネジメント分野の専門語彙や慣用文型（formulaic structures and expressions）、基礎知識などの内容を中心とした科目を開設し、理解力を側面からバックアップしている。

つまり、語学学習を通じて、専門教育が促進され、同時に専門教育を通じて語学学習も向上する、という相乗効果を持っている。理解力の向上が、更なる「やる気」を醸成することで、こうした科目は留学生にも評価が高く、大学側としても、単位として認定している。

この科目を担当する教員は国際文化交流学院の教員である。だから教員自身が多くは経済・マネジメント分野の専門家ではないため、留学生にとって専門知識を身につけることが如何に難しいかを身にしみて感じることができる。

また、科目の時間配分に関して言うと、大学1年生の時には、中国人学生には必修科目としての道徳思想や毛沢東思想理論、英語など留学生には必要がないものの代わりとして、その振り替え科目を用意している。

#### 上海財経大学留学生向けの振り替え科目

中国人学生向けの科目	単位	留学生向けの科目	単位
情勢と政策	1	中国の概況	4
毛澤東の思想、鄧小平の理論、 “三つの代表”の重要な思想	4	中国文化の概論	3
大学生の修養	2	中国の礼儀	2
軍事理論	1	中国文学經典の概論	2
英語 1	5	中級ビジネス中国語（経済、貿易 関係）	4
英語 2	4	上級ビジネス中国語（経済、貿易 関係）	4
英語 3	4	上級中国語	4
英語 4	4	中国語ライティング	2
合計	25	合計	25

#### 二、修士課程における留学生の専攻の教育問題について

日本に来て、大学院へ進学する留学生の多くは、大学院で選択した専攻と、学部生時代に専攻していた分野は、必ずしも同じではない。私が留学したときのクラスメイトは、

学部時代に日本語専攻の人もいたが、理工学を学んでいた人もいった。たとえ以前学んでいた専攻分野と同じであっても、日本の大学と中国の大学では専攻科目のカリキュラムや教材は異なる。そのため実態としては、日本人の学生にとっては学部生のときに既に学んだことでも、留学生にとっては知らないことも少なくない。

私が日本に来て、選択した専攻は教育学である。その時、日本の大学と中国の大学の教育学原理と比較教育などの科目の内容と教科書が大きく違うことに気づいた。基礎知識が不足していると、留学生が講義を聴く際にも支障がある。もし教師がこうした留学生の基礎知識不足に対して、少しでも多く理解を示して、彼らにふさわしい参考書を提供し、特別な指導をしてくれたら、留学生がより早く専門分野に対応することが出来るのではないか。

増加する留学生に対する受入側のハード面とソフト面の整備が更に必要なのではないだろうか。

次に、修士課程の授業の内容について、少しふれたいと思う。大学の授業の内容と教授の研究は確かに密接な関係がある。だから、一部の教授は自分自身の研究成果をそのまま授業の内容としている。これらの研究はもちろん最先端のもので、興味深いもので、こうしたことを学ぶ能力のある学生には、十分価値のあることだと思う。しかし、一般の学生、特に留学生にとっては、それらの内容を理解し、受け入れることが必ずしもできるわけではない。

私自身の経験からいうと、私の専攻は生涯教育だったが、2000年頃には、「生涯教育」という言葉さえ中国ではほとんど知られてなかった。中国経済の発展とともに、今後中国の社会教育もしいに発展していくと思う。私は、生涯教育、生涯学習に対して強い学習意欲があったにも関わらず、基礎知識が乏しいことを感じた。

私の指導教官はとても個性的な学者で、文学、芸術、心理学などのあらゆる分野を研究されていた。当時、教授は私達院生に「生涯教育特論」と「生涯教育演習」という二つの必修科目を開設してくださった。教材は教授自らが執筆した「彷徨のまなざし - 宮本常一の旅と学問」と「新説 北大路魯山人 歪められた巨像」の2冊の本が用いられた。宮本常一は有名な民俗学者で、北大路魯山人は陶芸家であり、料理研究家でもある。なぜ私の指導教官がこうした本を選んだかということ、先生自身の著書の中で、「教育というものを科学としてとらえずに、芸術として再構築してみたらどうか」という問題提起をされているからです。今日、日本では学校教育の中で様々な問題が発生していますが、これは教育を科学的な観点から解決しようとするからうまくいかないというのが指導教官の考えであった。

授業はSeminar形式で行われた。選択科目の学生は少人数だったため、教授は私達に二、三章選択させ、毎回一人ずつ、一章分の要約とそれに対する自分の考えを発表させた。その後、教授と他のクラスメイトが意見を発表した。教授は私達がそれぞれ違った意見を発表できるように促した。さまざまな角度から問題を研究し、積極的に自ら考えることが私にとって後の研究の大きな助けとなった。

しかし、実のところ、生涯教育や日本の教育現状などをもっと勉強したいと考えていた。私達はやはり専攻分野の講義で、日本の教育専門家の教育問題に対する考え方などを知りたいと望んでいました。

このほか、大学の教授が授業の際、意識して欲しいことがある。留学生の語学力は日本人学生と必ずしも同じではない。講義をする上で注意して欲しいいくつかのポイントがある。留学生にとって「聞く」ことは「見る」ことよりも難しいことが多くある。そのため専門用語を用いるときには、出来るだけゆっくりと話をすることと、黒板に書くことをお願いしたいと思う。キーワードを黒板に書いてくれたら、留学生の理解に役立つと思う。例えば私自身について言うと、日本の外来語はとても難しく感じる。もし教授が外来語を日本語に加えて英語で書いてくれたら、より簡単に理解することができる。

### 三、研究方法のトレーニングの問題

日本の大学院の授業の大部分はセミナーの形で進められ、学生がセミナーの前に大量の資料を閲覧し、レポートにまとめ、それを元にして自分の考えを発表する形式だと思う。これは中国人の留学生にとって一つの大きな挑戦である。なぜなら、中国の大学ではこのような形式の授業は殆どない。学部生、大学院生にかかわらず、講義の形式は大部分、教師が一方向的に話をすることが主である。学生は基本的に受身の立場で、自ら問題を考える等といった専門的なトレーニングに欠けているため、大部分の人が「研究」と「学習（勉強）」の区別が明らかでなく、研究にも独創性が少ないのだと思う。

2010年短期研究の機会があり、私は6月から8月にかけて、母校に滞在していた。その際、ある大学院生のセミナーに参加した。その場で中国人の留学生の発表内容は全て、中国の教育に関するものである。しかし、彼らが参考にした文献は日本の学者が書いたもので、これらの資料をほとんど検証することもなく、ただ発表の時に直接引用していた。オリジナリティの不足はしみじみ感じた。

中国人留学生は専門知識だけではなく、学習研究方法にも更に課題を抱えていると痛感し反省する。先生方が留学生、特に中国人留学生に対して、学習方法に関しても、指

導を強化してくれれば、留学生の研究がさらに深まるはずである。

参考文献

- 1 宮原秀夫 「大学の国際戦略の展開」 『IDE』2006年7月号、4 - 8 頁
- 2 栗原孝 「日本社会のグローバル化と留学生政策：『留学生 30 万人計画』の妥当性の検討」 『東アジアにおけるグローバリゼーションと国際化教育』、亜細亜大学アジア研究所、2009年2月、7 - 43 頁
- 3 上原麻子 「留学生の生活と教育」 『岩波講座大 11 巻 現代の教育：危機と改革、国際化時代の教育』 岩波書店、1998年、203 - 223 頁
- 4 溝上慎一 「学生を能動的学習者へと導く講義型授業の開発 学生の内面のダイナミックスをふまえた教授法的視点」 『教育学研究』、2003、70 ( 2 ) 165 - 175 頁

本稿は上海市 2010 年度教育研究項目（項目番号 B10016）「日本研究型大学における学士課程カリキュラム改革及びその啓示」の研究成果の一部である。

本稿は、2010年12月16日「名古屋大学国際化拠点整備事業教授法研修」の講演会で、本人の講演の原稿をもとに改めて作成したものです。記して謝意を表したい。

執筆者

管斌 上海財経大学国際文化交流学院講師